



安泰良子句

中村俊定文庫  
文庫 18  
16



中村俊定文庫



永正十五年八月十日



東山安養寺千句

何人 中一

月や—は世の群衆の智の<sub>祇</sub>方  
 抑さの<sub>特</sub>荒<sub>荒</sub>の<sub>荒</sub>時  
 一<sub>字</sub>井<sub>字</sub>山<sub>字</sub>人<sub>字</sub>の<sub>字</sub>統<sub>字</sub>と<sub>字</sub>ら<sub>字</sub>る<sub>字</sub>て  
 一<sub>字</sub>海<sub>字</sub>を<sub>字</sub>ら<sub>字</sub>る<sub>字</sub>こ<sub>字</sub>の<sub>字</sub>山<sub>字</sub>得<sub>字</sub>通<sub>字</sub>融<sub>字</sub>  
 一<sub>字</sub>く<sub>字</sub>も<sub>字</sub>打<sub>字</sub>つ<sub>字</sub>も<sub>字</sub>猿<sub>字</sub>の<sub>字</sub>を<sub>字</sub>一<sub>字</sub>産<sub>字</sub>

あゝぬほとくくうりのやま  
西彩  
高麗の袖の木のまゝ  
宗碩  
八月のころの風のまゝ  
えん  
うねの音はゆるゆると  
是の  
まゝにまゝに  
秋のまゝ  
山家  
いさゝか  
大のぬき  
まゝにまゝに  
舟桂  
はらばら  
あゝのまゝ  
浦のまゝ  
下政  
まゝにまゝに  
満ちまゝ  
春のまゝ  
底の

あゝぬほとくくうりのやま  
西彩  
高麗の袖の木のまゝ  
宗碩  
八月のころの風のまゝ  
えん  
うねの音はゆるゆると  
是の  
まゝにまゝに  
秋のまゝ  
山家  
いさゝか  
大のぬき  
まゝにまゝに  
舟桂  
はらばら  
あゝのまゝ  
浦のまゝ  
下政  
まゝにまゝに  
満ちまゝ  
春のまゝ  
底の

夕景をひしきるの地を長  
谷の所は清き水に流るる  
まじき山にありては  
まじき名おとすに  
あしし月を油やま  
たのあまの  
命をたむけの

いふのさかたに  
まじき山にありては  
まじき名おとすに  
あしし月を油やま  
たのあまの  
命をたむけの

雞山月をひしきるの地を長  
谷の所は清き水に流るる  
まじき山にありては  
まじき名おとすに  
あしし月を油やま  
たのあまの  
命をたむけの





いづかきしむるに月六あはれは秋は  
今の昔もあつたけりいひのりた安  
かきかゝるぬききりのあつたき  
つぎつぎにあはれきりて  
いづかきしむるに月六あはれは秋は  
五月あはれきりのあはれは秋は  
いづかきしむるに月六あはれは秋は  
いづかきしむるに月六あはれは秋は  
いづかきしむるに月六あはれは秋は

またいづかきしむるに月六あはれは秋は  
あまのやまのあはれは秋は  
うらみきりていづかきしむるに月六あはれは秋は  
たちりやまのあはれは秋は  
あけけしむるに月六あはれは秋は  
行くゆきのあはれは秋は  
いづかきしむるに月六あはれは秋は  
いづかきしむるに月六あはれは秋は  
いづかきしむるに月六あはれは秋は



はあしつゝのあふらふに流記  
さあしつゝのあふらふに流記  
のあふらふに流記  
あふらふに流記  
すあふらふに流記  
さあふらふに流記  
あふらふに流記  
たあふらふに流記

田おきしつゝのあふらふに流記  
流しつゝのあふらふに流記  
あふらふに流記  
あふらふに流記  
あふらふに流記  
あふらふに流記  
あふらふに流記  
あふらふに流記

薄行 廿二

疾と云り月と有りの中森産  
や風吹すくまづおひの言記  
糸くねと夕や秋と縁し  
空く流る水のよしを  
這津さあまのあゝさけに  
こす替のいさゝくしる

相のやまを人の袖あは  
まはねとこゝろのいし  
月印のあゝさけに  
若くはつとまをさ  
名おとほは行の徒の  
身はあかしのよま  
とらぬ花のあゝさけに  
子粒のいさゝくしる

深き水に身をまかせし  
下りては神の御心  
此も鏡に照らされし  
たゞしき水に身をまかせし  
水鳥の聲のなきは  
いらちの心は  
清くあけぬの影を  
新しき水に身をまかせし

きよき水に身をまかせし  
いかに水に身をまかせし  
おとろけし世のまはる  
そのまはるまはる  
ぬきし水に身をまかせし  
いかに水に身をまかせし  
一たび水に身をまかせし  
いかに水に身をまかせし

此の公の里... 月ハ... 女  
 秋の初... 木  
 まり... 光  
 元  
 雅  
 記  
 五月某... 高

昭也州... 山田... 歌  
 ... 長  
 ... 死  
 ... 碩  
 ... 者  
 ... 宗  
 ... 在  
 ... 意

疾の如くたのめんとあはれ長  
かたきとてはなまなかにね  
こかきかきとてあはれ  
きしとてあはれ  
いしとてあはれ  
くしとてあはれ  
あはれとてあはれ  
あはれとてあはれ  
あはれとてあはれ  
あはれとてあはれ

乃其の如くたのめんとあはれ長  
月とてあはれ  
武とてあはれ  
あはれとてあはれ  
あはれとてあはれ  
あはれとてあはれ  
あはれとてあはれ  
あはれとてあはれ  
あはれとてあはれ  
あはれとてあはれ

下考女中さう綴りぬらぬて  
 月ととや命いさいのなるの雨  
 あらうさこの月の新糸長  
 け北の心とさふ秋糸  
 あはれなやうなる里人  
 とあしほつと中田にわつとそ  
 あらう江のぬさしめよら  
 雅信碩親長君

子の世やんまはるは優ゆと長  
 老くありま何あぬやえ  
 打中さうおれねんまのまの心花  
 うはしほや油とさふと  
 常さうさうさうさうさう長  
 二子さうさうさうさうさうさう  
 わささうさうさうさうさうさう  
 碩



山に雲の影をば  
影ふとらふは  
影ふとらふは  
影ふとらふは  
影ふとらふは  
影ふとらふは  
影ふとらふは  
影ふとらふは  
影ふとらふは  
影ふとらふは

何れの中

秋の風は  
秋の風は  
秋の風は  
秋の風は  
秋の風は  
秋の風は  
秋の風は  
秋の風は  
秋の風は  
秋の風は



冬の日知 明しふりつ 物し 花  
一 鞍よいづく 暮るもよみたに 寺の 項  
山 瑞もくく 此れ 此のまうり  
うやこい なるは 海なる 寺 保あま  
晴し なる 是も なる ぬ 花の 子 也  
昔あち なる 代も なる 心 信  
と 海なる 寺も なる 心 信 政  
ゆ なる 心 信 なる 心 信 雅

月よ なる 心 信 なる 心 信 光  
清なる 心 信 なる 心 信 光  
なる 心 信 なる 心 信 光  
け なる 心 信 なる 心 信 光  
心 なる 心 信 なる 心 信 光  
心 なる 心 信 なる 心 信 光  
心 なる 心 信 なる 心 信 光  
心 なる 心 信 なる 心 信 光  
心 なる 心 信 なる 心 信 光  
心 なる 心 信 なる 心 信 光







初の方の風みおつたに清く  
珠の多きをくし何の月  
神の多きをくし初に  
やうてまはるるゆけの  
子<sup>と</sup>のしるしあまの  
詠みし成夕あまの  
の記

何れもあまのしるしあまの  
詠みし成夕あまの  
の記



小藤より山外面の軒をけりて  
明くこのまきき海に水  
清く如く花のまのまの  
おもしろくあつたまの  
石路をいりてまのまの  
けり神にけりまのまの  
起りてまのまのまの  
明くまのまのまの

まのまのまのまの  
おもしろくあつたまの  
けり神にけりまのまの  
起りてまのまのまの  
明くまのまのまの  
まのまのまのまの  
おもしろくあつたまの  
けり神にけりまのまの  
起りてまのまのまの  
明くまのまのまの





七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十



いづれかたもかたしそそての露  
一穂斗も心早あいのそそ  
月には端も新にたれやえ  
あの下やうつこまけもあし  
ゆきも風をそそめあめも  
かよひのゆきもたれゆきも  
朝露もよるや雑子のあり  
くもるの道もあはぬ道

小毎系もこもあはれも  
清くも夜原も旅人の夢  
うづ花屋上の月やそそか  
秋風風のそそめあま  
ゆきも心のあはれもあ  
あはれもあはれもあはれ  
水もあはれもあはれ

油ふるく火のあふくし  
しほくあつていふのよなの山  
あふるちりぬとをせあ  
そとをたろと打あしあ  
たもあつたのひを名のせぬ  
しほくあつていふのよなの山  
あふるちりぬとをせあ  
そとをたろと打あしあ  
たもあつたのひを名のせぬ  
しほくあつていふのよなの山  
あふるちりぬとをせあ  
そとをたろと打あしあ  
たもあつたのひを名のせぬ

家いんし掃ろうしあな  
牛のいしり秋のあつた  
くねきをいふの月のあつた  
里いしりあつたの山のあつた  
西影いしりあつたの山のあつた  
たし油あつたの山のあつた  
あつたの山のあつた  
くねきをいふの月のあつた





賢いからいふは法の  
杉の山ありさして  
下葉の夕の影に  
たつてあしき  
とくもあまらるる海  
あまらるるも  
和らむるも  
やうに  
能

い  
い同はたのちま物  
かのかの無さ  
あつた  
里の  
より浪はあつた  
あつた  
あつた  
あつた





君にゆきやうまのりぬ  
入目のみくしきすいふこと  
りしよるあふく学おははる  
まうれけいしよすしき  
音ふも水のみえ乃ぬ  
けししれあまきふ  
ひやまのりやいふ月あし  
ゆきやうまのりぬの道  
長吟君能安記

秋にふたたびうらな  
和ふふのむかひあはれ  
あつむくしきすいふこと  
まうれけいしよすしき  
まうれけいしよすしき  
まうれけいしよすしき  
まうれけいしよすしき  
まうれけいしよすしき  
あまのりぬの道  
記



かぶりのみかをむきおろしあぶら  
取つてまろぬ世しと安んじし  
ちりしと出さぬはうしんよしと長  
友のやつれもよしと梅の油  
きしはの日記たうねきし福川  
中しとあつてしと。しと。しと。しと。  
このあつたやたなはつたはつた  
あつたあつたあつたあつたあつた

何草 中六

月よと秋をむきけしと  
あつたあつたあつたあつたあつた  
白雲の指乃つたあつたあつた  
田舎のうらあつたあつたあつた  
やうしとあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた

伴しん神をさしたぬ積のそく  
しるるに末の果をうたぬ  
月をうまのまの音の音に  
るるに斗直したるりるる  
頃をうまのつる梅のちとた  
あははあはあはあはあは  
交るるにうまのつる  
いぬのそくをさしたぬ積のそく  
政

うまのそくをさしたぬ積のそく  
しるるに末の果をうたぬ  
月をうまのまの音の音に  
るるに斗直したるりるる  
頃をうまのつる梅のちとた  
あははあはあはあはあは  
交るるにうまのつる  
いぬのそくをさしたぬ積のそく  
政











花の香もあはれなれば社  
にのりておのれにのりて  
まのりておのれにのりて  
まのりておのれにのりて  
まのりておのれにのりて  
まのりておのれにのりて  
まのりておのれにのりて  
まのりておのれにのりて  
まのりておのれにのりて  
まのりておのれにのりて

しるしの香もあはれなれば  
にのりておのれにのりて  
まのりておのれにのりて  
まのりておのれにのりて  
まのりておのれにのりて  
まのりておのれにのりて  
まのりておのれにのりて  
まのりておのれにのりて  
まのりておのれにのりて  
まのりておのれにのりて

初何 中七

11  
まのまにあらば月夜はなす  
かきし風はぬき松の戸  
山はさし水はあやしく  
うづらぎのけしきも  
いのまをさし砂のうす  
わらわのまをさし  
まをさし  
しあはれし  
は

11  
里道にあらば月夜はなす  
かきし風はぬき松の戸  
山はさし水はあやしく  
うづらぎのけしきも  
いのまをさし砂のうす  
わらわのまをさし  
まをさし  
しあはれし  
は

飛りつゝの心もなほまじき見  
泳ぐやあまのこころもあはれ  
まよひたる心もあはれまじき  
まよひたる心もあはれまじき  
月もあまのこころもあはれ  
あまのこころもあはれまじき  
深河を渡るあまのこころも  
袖のけしきもあまのこころも

何はあまのこころもあはれ  
まよひたる心もあはれまじき  
少路もあまのこころもあはれ  
あまのこころもあはれまじき  
暁の月もあまのこころもあはれ  
あまのこころもあはれまじき  
あまのこころもあはれまじき  
あまのこころもあはれまじき  
あまのこころもあはれまじき  
あまのこころもあはれまじき





世に... 政... 桂... 君... 宗... 松... 水

あ... 記... 油... 松... 水... 宗... 君... 桂... 政... 松... 水







其来の風は... 桂  
中... 雅  
其... 君  
... 其  
... 桂  
... 其  
... 其  
... 其  
... 其

源... 桂  
... 其  
... 其  
... 其  
... 其  
... 其  
... 其  
... 其  
... 其



あゝもかゝいもあゝいも(10) 位  
けいんくつ(11) 位  
うきんしごいの行くのまの君  
いよもいよもに居る御り君  
命のいぬすらひもいぬす  
うきんくつ(12) 位  
光あらひの年の秋の月  
すくすくあはれ  
君

あゝもかゝいもあゝいも(10) 位  
けいんくつ(11) 位  
うきんしごいの行くのまの君  
いよもいよもに居る御り君  
命のいぬすらひもいぬす  
うきんくつ(12) 位  
光あらひの年の秋の月  
すくすくあはれ  
君

と備向の流とや一法の花  
いのちのつとめしし道は  
清くまはれし人の氣さ  
しらまはれし人の心  
九生の土記の果はた  
あまの月のまはらし  
たのぬきも月と清き  
うらやまの人の心

きらばらぬ道はあはれ  
あまの月のまはらし  
たのぬきも月と清き  
うらやまの人の心  
あまの月のまはらし  
たのぬきも月と清き  
うらやまの人の心  
あまの月のまはらし  
たのぬきも月と清き  
うらやまの人の心

中山をく底き御まうこりけり  
たつこもあつたし海の浦者  
千和た神とこしる五月多  
名 名もあつてやすわもその声  
吾信とよのまこ狩るませ六  
我とけうあや色あつたし  
佛とつるましあつたし和の  
こるましあつたしあつたし

しんかか／＼あつたし  
かよあつたしあつたし  
月よあつたしあつたし  
あつたしあつたしあつたし  
あつたしあつたしあつたし  
あつたしあつたしあつたし  
あつたしあつたしあつたし  
あつたしあつたしあつたし



旅旅しむそのこの御り有  
あつたけいれいなきさきあき  
いそくしむしむりぬたの御り  
ありは種こゝろの入あいのこゝろ  
やうしむやあきのふりあき  
ちのわらやうた御いしむあき  
あつたけいれいぬたの御り  
いそくしむしむりぬたの御り  
ありは種こゝろの入あいのこゝろ  
やうしむやあきのふりあき  
ちのわらやうた御いしむあき  
あつたけいれいぬたの御り  
いそくしむしむりぬたの御り

ういよのあかぬ御りあつたけ  
あつたけいれいぬたの御り  
ありは種こゝろの入あいのこゝろ  
やうしむやあきのふりあき  
ちのわらやうた御いしむあき  
あつたけいれいぬたの御り  
いそくしむしむりぬたの御り  
ありは種こゝろの入あいのこゝろ  
やうしむやあきのふりあき  
ちのわらやうた御いしむあき  
あつたけいれいぬたの御り  
いそくしむしむりぬたの御り





はやくの来いあしひもつ  
くちく月や才と熟るに  
ふあつたのはええまもつ  
しあきりしんまもあけ  
油いんやらあれやまも  
くちくのもあれあれあ  
まのうをあしひもつ  
たあやあしひあしひ  
はやくの来いあしひもつ

はやくの来いあしひもつ  
くちく月や才と熟るに  
ふあつたのはええまもつ  
しあきりしんまもあけ  
油いんやらあれやまも  
くちくのもあれあれあ  
まのうをあしひもつ  
たあやあしひあしひ  
はやくの来いあしひもつ

けしきその新なる世の山も  
いづちあふりし一々せ  
涼しくも涼み由のさ  
ふらふ涼のまこと  
為事よ入江の夕日を  
月しづかのほのぼの  
形人し漕かるや  
涼みそしたるにあら

年終たる里々  
袖に後のあ  
りて

しづか  
か  
涼  
の  
あ  
は  
は  
は



そららたけのひやんを月に見れば  
すくなくともちよき海にこそか  
かゝるちよき海にこそか  
月とたけのほかに女は  
玉すくなく結のおもひつる者  
風のひかりをたそげさる  
かゝるちよき海にこそか  
海にこそか  
海にこそか

恨あふれぬを海にこそか  
かゝるちよき海にこそか  
あやふくなく結のおもひつる者  
あやふくなく結のおもひつる者  
すくなくともちよき海にこそか  
月とたけのほかに女は  
玉すくなく結のおもひつる者  
風のひかりをたそげさる  
かゝるちよき海にこそか  
海にこそか  
海にこそか

一字彙類

中十

月... 略... 雅... 信...

早... 柳... 朽... 山... 学... 人... 有... あ...

正ま山やま舟ふね浪なみぬぬ心こころつつ泊とまり水みづ々々桂けい  
りりののちちせせうう海うみ方かたののこころろをを寄よ  
みみららうう也やににらられれぬぬ程ほどとと思おもははすす  
ととけけれれはは一ひとつつきき山やま巨こほら大だい  
月つきああししののめめああぬぬああははののああままああ  
ははららたたぬぬははののこころろにに一ひとつつきき  
本ほんののああままああののこころろにに一ひとつつきき  
ああままああののこころろにに一ひとつつきき

二  
ゆゆききううひひににししををううづづみみををききききぬぬはは長なが  
おおととこころろににけけるる九くののこころろにに一ひとつつきき  
ああつつゆゆききぬぬああままああののこころろにに一ひとつつきき  
ししちちいいつつとと袖そでににははききぬぬはは長なが  
おおももののこころろにに一ひとつつきき  
川かわははああままああののこころろにに一ひとつつきき  
ああままああののこころろにに一ひとつつきき  
ああままああののこころろにに一ひとつつきき







名根より生ぬるわらあま〜  
のそめる水も秋よ〜  
新ら狂猿の月のはき粉子  
少波のなまよ〜  
丘と〜  
深ら〜  
名根〜  
す〜

あ〜  
列〜  
何〜  
〜  
あ〜  
す〜  
新〜





山城名勝志 愛宕郡種玉菴条云々

宗祇信師菴也傳云在干東山不知在何或云祇公没後宗長信師  
住此菴三年按宗祇三回忌辰於安養寺有千句連歌道  
遠院殿牡丹花宗長等連歌為連歌疑種玉菴在安  
養寺字可考也

同安養寺条云安養寺千句水云元七月道遠院殿改云同傳云  
司執事故祇菴主才三回忌辰として干東山安養寺と  
連歌上下各此今所傳傳也

宗長記云月宿る朝則年々異地の方を見出さるるの事干東山  
天ふるうて子らの予いひしに道遠院殿有栢樹所子使  
比所る町傳し伝邱日名林對馬ありと云 なるが十  
月よりありしにのりゆ 子長

干養寺干山山在知恩院より干養寺也  
傳云此寺舊仁亂中為烏有之及有人源照者連立堂在焉  
丸東五條坊門北一併堂近此山今本堂是也照有蒙後小

ISSEID

此卷是託賜紫衣盲人紫衣始于...

昭和十一年初夏...

後定...



